14.5-45
1200501212555

貨幣論叢
第二號

名目的貨幣論を駁す

大藏省理財局

(代筆寫)

始

一、貨幣論叢は歐米に於ける諸家の貨幣理論並貨幣政策に關する最近の純科學的主張並批判の論文を紹介するを以て目的とす。

一、叢書は成る可く隔月に發行すべく既刊並豫定の分左の如し。

第一號　貨幣の本質（大正十年六月）

第二號　名目的貨幣論を駁す（大正十年八月）

第三號　貨幣に關する諸學說（翻譯中）

第四號　洪牙利過激派政府の貨幣政策（翻譯中）

（以下續刊）

14.5
451

48.6.28
圖書館

944380

解說（譯者）

本編はヂーグフリード・ブッゲ(Siegfried Budge)が國民經濟統計年報(Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik)一九一九年十二月號に寄せたVom theoretischen Nominalismusの翻譯である。

本編はクナップや、ベンディクセンの貨幣學說は「眞の經濟的貨幣問題即ち商品と貨幣との交易問題を解決し得ないから貨幣の經濟的學說としては存在の價値がない」と云ふことを叙述する目的で書かれたものである。即ち名目論者が貨幣に固有價値なしと云つたことを極力非難し、貨幣は價値を測定するものであるから其自身に價値がある。既に定つて居る價値相互の關係を表示する比例數でなくて價値の絶對的の大さを表示し價値相互の關係を比較し發見するの具に供せらるゝものであると論じた。名目論者が不換紙幣の實在から貨幣の名目性を論じたのは正當な前提に出發して誤れる結論に達した好個の例であると云つて居るが不換紙幣にも價値を認めた點に於て普通の金屬派の議論と異つて居る。金屬派の議論が大戰の影響で改造されたとでも云ふことが出來ようか。

名目的貨幣論を駁す

一、

一九〇五年にクナップの貨幣國定說(Staatliche Theorie des Geldes)が出版された際には當時の經濟學者が殆一齊に同書を攻擊した。クナップの書は貨幣を法律的にのみ見て貨幣に關する固有の經濟即ち貨幣價値論を閉却せるのみならず、之を否定したものであるから、貨幣の本質に就ては經濟學上何等貢献する所がないといふ事は一般に認めらるゝ處であつた。所が一九〇八年になつて漢堡不動產抵當銀行支配人フリードリッヒ・ベンディクセンと云ふ實際家が現れた。彼は貨幣論の處女作たる「貨幣の本質」(Das Wesen des Geldes)竝に其後に著した諸書に於てクナップの理論を根底とせるのみならず、法律的に傾き過ぎたクナップの理論を經濟上の方面から見て補充し、大成しようと企てた。クナップは自分の議論は本位政策上如何なる結論に達するやを考へなかつたけれどもベンディクセンは之に反して本位政策上の目的を追及した。彼の理想は購買力の固定せる貨幣、即ち彼の所謂古典的貨幣(klassische Geld)である。彼は國家又は國家によつて「貨幣創造」の權利を賦與された銀行が古典的貨幣を「創造」し得るといふ議論の根據をクナップの學說に見出し得たと信じてゐた。

クナップの貨幣論は名目論を根據として居る。即ち「貨幣の固有價値と云ふものは存在しない、從

來人が貨幣の固有價値と稱し來つたものは商品價値の反映に過ぎない」と論じて居るが、此の論に依れば貨幣の方面から見た物價問題と云ふものは存在しないことゝなる。貨幣の貨幣たる所以は專ら其の「通用性」(Geltung)に在り、此の通用性は貨幣を構成する材料の如何に關係なく國家が債務銷却手段として幾何の價値があると定めた事によつて發生するのであるといふ。例へば人が三千麻支拂はねばならぬといふことは國家が命名した「麻」と稱する「價値の單位」の表現する支拂手段の三千倍に相當する量を支拂ふことであつて之より多きを要さないと共に之より少なくても不可ぬと云ふことになる。從て金錢債務の內容の本質的要素は支拂手段の材料其物でなく其れに對して國家が命じた名稱である。而して金錢債務の內容上本質を成すものはやがて貨幣の本質を決定すべきものであらねばならぬ。

前にも一言した如くペンディクセンはクナップの議論は經濟學上貢獻することなきを認め、仍て經濟學的に其議論を完成しようと企てたのである。彼の說に依れば經濟學上貨幣とは或給付の代償として得た「賣却を目的とした消費し得る生產」に對する權利の證憑であつて價値の單位を以て表示し貨幣と云ふ小片に化體したものを意味するのである。換言すれば貨幣は給付の證憑であり、同時に其の給付と同價値なる反對給付に對する支拂命令である。そこで若し貨幣が適當に此の作用を行ふものとすれば新に給付が行はるゝと共に新しい證憑が取引場裡に入り反對給付が行はるると共に其の證憑は取引場裡から去らなければならぬと云ふ結果が必然生じて來る。然るに貴金屬を材料とする貨幣は此の要求を滿して居ない。斯かる貨幣は賣却財貨と共に發生消滅せずして貴金屬生產と云ふ偶然の事實に依つて成立し斯かる貨幣が高價の材料から成り流通手段であつて消費財貨でない爲に市場に止つて居るのを常とする。從てペンディクセンに依れば貴金屬貨幣の眞の本質に反し貨幣の經濟的作用を充分盡すことが出來ないから「古典的貨幣」ではないのである。蓋し多くの證憑又は支拂命令が消費財貨の生產に關係のない原則によつて支配せられるならば貨幣の購買力の不動と云ふ樣なことは最早問題にならないからである。貨幣の本質的要素は其の材料に在ると信ずる位大きな間違はなく又本位金屬から成る支拂手段のみが本當の貨幣であるとする樣な金屬本位は自家撞着のことである。

ペンディクセンに依れば金屬貨幣に出來ない所を材料價値なき貨幣に出來ると云ふのである。材料價値なき貨幣は金屬貨幣に缺けて居る性質を具へて居て需要に從つて發生消滅することが出來る。材料價値なき貨幣即ち高價な材料に束縛されない貨幣は理論上善良なる本位で從つて推奬すべき本位制度である。

ペンディクセンはクナップの名目的貨幣論を經濟的方面から補足しようとする試みの根底となつて居た上述の思想を正しいものと思つたのであらう。然し注意して讀んだ者は此の思想に大きな缺陷があることを見逃すことが出來まい。而して吾人は此の缺陷は筆者の責任ではない即ち思想の表現に誤があるのではなく思索其のものゝ缺陷の結果であつて名目論の基礎の上に立つて貨幣の本質を經濟的

に說明し理會しようと企てる者は誰でも恐らく此の誤謬に陷らざるを得まいと云ふことを本篇の初に當つて力說して置きたいと思ふ。クナップに於ては斯ういふ樣な思索の缺陷が著しからず彼の學說の組織の秩序整然たることのみ目立つのは彼が經濟上から貨幣を觀察することを徹底的意識的に退けたのみならず斯うした觀察は全く不能だと宣言した爲である。

戰爭の經驗特に一度戰爭に參加した國の大部分が紙幣本位に移つたと云ふ事實、或交戰國（我獨逸國や墺國は特にさうである）は今日の狀況から見て尙ほ長く金本位に戻れそうもないといふ事實、瑞典の如き中立國も亦本位貨幣の購買力を固定させる爲に中央銀行の金買入義務を撤廢したと云ふ事實等は學者をも實際家をも騙つて名目論の信者たらしめた。之は別に怪むに足らない。蓋しクナップは既に金錢債務の名目性を有すること及或國々では長い間不換紙幣が流通することが出來た例があるといふことから貨幣の純「名目的」本質を推論したのであるからである。

クナップは「純粹の紙片貨幣と云ふ樣な現象は眞に實在して居る、而も此等は名目的價値の單位を認めねば說明がつかない」と云ふた。是は實に異論のない正確な前提から全く誤つた結論が生ずると云ふ好個の例である。蓋し高價な材料から成立つて居らず又斯かる材料に束縛されない貨幣の存在は「名目的價値の單位」の承認と云ふ事に逃げ込まずとも純經濟理論で自ら說明がつくのである。

然し名目論は經濟上不可能な貨幣學說である。此事を詳しく述べるのが本論文の目的とする所である。私は先づ本年報五十七卷第四九七頁以下に掲載されたベンディクセンのカルル・ディールの說を駁論した論文を引き度い。蓋し右の論文中には玆に論ぜんとする問題に就きベンディクセンが特に詳細なる叙述を爲してゐるからである。

二、

右論文の初に於てベンディクセンは今日一般に行はるゝ貨幣學說に對して二の非難を加へて居る。

一、金本位論者は單に本位政策的理由より自說を主張し斯かる本位が貨幣の實質に適合するや否やを究めない。

即ち貨幣の購買力の安定に對して必要なる保障を與ふるや否やを究めない。

二、彼等は「經濟的作用」の方面に遡つて充分研究することをしない。彼等は貨幣を國民經濟上に於ける職能から離して觀察し、又假令貨幣論を一般經濟理論と結付ける必要を認めても經濟的活動の本質を單に占有及交易となし生產及消費を閑却してゐる。

右二個の非難は孰れも全く根據なきものである。先づ金本位論を唱道する學者が全く便宜主義の立場から金本位を擁護するといふのは當らない。金本位論に贊成する學者は理論上の理由から之を唱ふるのである。即ち彼等はベンディクセンと反對に此の金本位がベンディクセンの唱道する「自由本位」(Freie Währung) よりも遙によく貨幣の經濟的本質に適合すると信ずるが爲めである。更に換言すれば金本位論者は此の金本位を以て最適當なる、又假令絕對不變ではないにしても（絕對不變といふこ

とは不可能だと信じてゐる）比較的安定なる貨幣の購買力を保障する本位制度であると信じてゐるのである。從つて「金屬派」の方には別に懈怠の罰は無く要するに見解の相違に外ならぬ。然しながら從來世界が自由本位、殊に紙幣本位によつて經驗した所が此の本位制に有利でなかつたことは否むことが出來ない。然し從來の經驗ばかり當てにすることも出來ないから此の見解も餘り買被つてはならない。紙幣本位が從前から存在して居つたのに貨幣の購買力を安定せしむるの效果を發揮し得なかつたのは新貨幣發行の權限を有するものが古典的貨幣創造の原則をよく注意しなかつた爲であるかも知れない。吾人は尙ほベンディクセンの所說に或程度迄贊意を表することを吝むものでない。理論上から云へば紙幣本位でありながら貨幣購買力の安定せる場合を考へることが出來る。紙幣本位は必ず通貨膨脹の結果を來すと云ふ論は理論上は承認することが出來ない。そこで次に如何なる種類の本位の下に於て膨脹を來す危險がヨリ太であるかと云ふ問題が起るが此の問題に答ふるに當つて吾人は金本位論者の說に左袒するに躊躇しない。金貨の購買力が金の生產と云ふ偶然の事實に左右せられるのは寔に憂ふべきことであるが國家の任意に依て貨幣が創造せられる場合に存する危險に比較すれば殆ど論ずるに足りない。

尙ほ國家は「貨幣創造」に對して立派な原則を樹立することが出來る。何故ならば國家は單に貨幣の創造者たるに止らず現行法の創造者であつて必要と見た場合には何時でも——曾に戰時ばかりではなく——此の原則を打破することが出來る。そして此の場合に起る反對は現行金本位制を紙幣本位に變へる場合よりも遙に小いのは自然の勢で特に金が國際取引上他の國に於ても亦本位金屬である場合にさうである。

それからベンディクセンが他の貨幣論者に對して行つた第二の非難即ち他の論者は貨幣と商品との交易に拘泥し過ぎ經濟的作用の根本要素たる生產と消費に着目して是等の要素から貨幣に關する現象を理解しようと試みなかつたと云ふ攻擊は全く其の當を得ないものである。最近重農學派が興つて以來國民經濟的現象の根本要素を研究し生產消費の行程を示し是に依て國民經濟上の總ての現象を說明し解釋しようとすることが經濟學說の目標であつた。そして經濟現象の研究に當り貨幣なる羅衣の裏を觀察することを努めた。即ち先づ貨幣を充分に抽象し斯くして得た認識の上に立つて初めて貨幣理論に到達せんとした。其の結果互に全然反對の立場に在る新しい學者たるリーフマンやカッセルが經濟關係の研究上貨幣の此の抽象に付上述の學說に非難を加へねばならぬと信ずるに至つた程である。

然し孤立經濟に關する場合のみならず私有財產竝分業を基礎とする經濟社會の諸經濟現象を說明することが出來る場合に於て學說が交換論とならざるを得ざること及此の交換論の上に貨幣學說を發展させることが必要とされたと云ふことからは非難の種が生じないのは確である。ベンティクセンが貨幣の「經濟」學說に於て此の關係を明にしなかつたと云ふことに付ては世人はもつと〳〵攻擊すること

が出來る。

ペンディクセンの所論に於ける上述の缺點は是に關係してよく現はれるから是に付て詳しく說明することが必要である。

三、

ペンディクセンはクナップに倣つて其の反對論者を「金屬派」と名づけ彼等が貨幣を交易財貨と見たと云つて攻擊してゐる。ペンディクセンの說に依れば貨幣の起源は交易財貨であつたが漸次其の本質を變じ交易的性質を全く失つた。即ち彼は「金屬派」は貨幣の起源に對する說明と其の理論的解釋とを取違へたと云つて攻擊した。そこで問題は、貨幣は現代に於ては最早本當に交易財貨ではないかどうかと云ふことに歸着する。

吾人は既にペンディクセンが貨幣を單に經濟的給付の證憑であり從つて反對給付に對する支拂命令であるとしてゐることを述べた。彼は他の著書で貨幣の自然財貨に對する關係は芝居の入場券や(Eintrittsbillet)食事の食券(Speisemarke)の樣なものだと云ふたことがあつた。で若し國民經濟の內部に於て對應する財貨の分量を變せずに氏の所謂「人場券」や「食券」たる貨幣の數を變更したならば貨幣の財貨に對する支配力は變動し即ち貨幣單位の購買力は動かざるを得まい。

經濟學說の研究者はペンディクセンの此の最後の結論は非常に昔の貨幣數量說に近いものだといふことに氣付くであらう。然し貨幣數量說は或一點に於てペンディクセンの學說よりも優れて居る。貨幣數量論者は貨幣數量の變動は貨幣單位の購買力を動かし從て財貨の(貨幣を以て表示したる)價格の高に影響すると云つたのみならず如何いふ風にして此影響が起るかといふことをも說明した。同論者は吾人に此の作用は財貨と財貨とでなく財貨と財貨とが交換される市場に於て行はれるのだと云つた。此の市場に於て提供された貨幣の數量が變じた場合に於て財貨の數量に依て代表される貨幣の需要が動かない以上は貨幣價値が變動するのだと貨幣數量說は敎へて居る。即ち是が貨幣「價値」であつて貨幣の購買力は是に左右されて居る。此の說は例令多くの缺點があるにせよ徹底して居ることは認めぬ譯にゆくまい。然らば財貨が貨幣に對して交換されると云ふのは何を意味するのであらうか。財貨の所有者でもなく貨幣の所有者でもない處の交換兩當事者が自己の欲する貨幣若くは自然財貨を「無價」で得ることは出來ぬといふに外ならない。或物を獲得するのに犧牲を拂はなければならない、即ち之に對して、代價を支拂はねばならぬと云ふことである。然り而して獲得の爲に代價を支拂はなければならぬ樣な物は(他の點に付て如何いふ分類をしようと勝手であるが)兎も角「價値」ある物であるに違ひない。

是に付て吾人はペンディクセンの思索に存する缺陷を見た。此の缺陷ある爲に彼がクナップの貨幣理論を經濟的方面から補充することが無效になつてしまつた。一方に於て彼は貨幣の購買力は流通貨

幣の數量に依て影響されることを認めて居るが他方に於て此の影響を生ずる基礎組織に付て少しも語らない。氏は斯かる作用が交易取引の行はれることのみより生ずるのだと云ふことに氣が付いてゐない樣である。彼は國民經濟は中央權力に依つて支配されたる有機體であつて其の有機體は一の給付に對して證劵を發行し其證憑に依て反對給付に對する權利が得られるのだと解釋して居る。然し交換經濟的に組織された經濟社會では決してそんなことが行はれるものではない。國家や中央銀行は隨分多くの「證劵を創造」することが出來るかも知れないが購買力に對して影響し得るのは市場に於ける貨幣の數量のみである。即ち交易取引の組織に依つてのみ行はれるのである。そして交易取引なるものは一の有價物と他の有價物の交換に外ならない。

ベンディクセンは貨幣其物に價値がないと唱へた爲め貨幣を入場劵や食劵に比喩へるの誤謬を敢てするに至つた。彼は吾人が一定の財貨(又は勞務)を得る爲に使ふ「切符」其の物は交換の對象でなくて貨幣對觀劇、貨幣對食事、貨幣對運送行爲等凡て既に行はれた交換の證憑であるといふことを少しも考へない。然し貨幣は單に一定の財貨を得せしむるものでなくて一般に凡ての財貨を得せしむるものだから是だけの理由で專ら獨立した交換行爲の對象であらねばならぬし又あり得るのだ。それ故にまた有價物であらねばならぬし又あり得るのだ。貨幣の購買力の問題と貨幣價値の問題とは同一である。

即ち「生活の論理」(ローヒククスレーベンス)は貨幣に價値あることこそ要求すれ貨幣の無價値を要求するものでない。然しながらベンディクセンは之に對して曰ふであらう。「今日多くの場合に商品對貨幣の交換は實際に於て行はれない。人は物價を貨幣で計算するけれども實際に於ては貨幣を支拂ふことなく商品の物々交換が行はれるのである」と。然し是は表面ばかり觀た謬見である。現實に貨幣の授受が行はれない場合にも亦商品對貨幣の交換はあるのである。實際貨幣が支拂はなければ其の代りに貨幣に對する債權が成立する。そしてそれには二つの場合があり得る。第一は斯かる債權が本當の貨幣と同じ位圓滑に流通する樣になる場合で然らば商品授受を基礎とした斯かる債權の存立が現實の交換と見られるのである。是は英國の著者が通常「預金貨幣」(deposit currency)と呼びベンディクセンが「振替貨幣」(Giralgeld)と名付けた交換手段の場合である。斯かる振替貨幣は銀行劵と全く同じ本質を有するもので此の點に付てはベンディクセンは正確な認識をした。金屬本位貨幣が行はれる場合には中央銀行へ此の振替貨幣を持て行けば銀行劵を持て行つた時と同じく本位貨幣に兌換される。即ち本位貨幣に對する支拂命令である。其價値を代表するものである。從つて右の場合は商品對貨幣の交換が行はれたと同じことになる。又金屬兌換の强制がない時には眞の貨幣に對する不換紙幣と同じものになる。然しさう云ふ場合にも固有の價値を持つて居るのであつて決して商品價値の價値無き代表ではない。

第二の場合は商人の帳簿信用の場合であつて是は賣買、代金の單純なる猶豫に過ぎない。此の場合にも商品對貨幣の交換があるので貨幣の給付が將來に延期されたものである。然し價格即ち貨幣給付

の高は現在の貨幣價値を基礎として定められる。そして斯かる貨幣價値は商品對貨幣の交換關係に基いてのみ存し得るので從つて此の價値は商品對貨幣の交換によつて成立したものと言はなければならぬ。

是で經濟的貨幣理論としの名目說が片が附いたらしい。貨幣價値を否定し得ると信ずる貨幣の經濟學說は其れ自體不能論である。名目論者に對しては貨幣を經濟的範疇と見ないで純法律的範疇として見貨幣の額面に現はれて居る債務の銷却手段として見ると云ふ逃路が開かれてあるのみである。是はクナップの爲した所であつて彼の國定說の第二版に新に加へられた「所謂貨幣價値」の一章を注意して讀んだ者はクナップに取つては貨幣は經濟的範疇に屬せず貨幣の側から貨幣價値に影響を及ぼす樣なことはあり得ないと考へて居たことを疑はないであらう。茲に於てペンディクセンの「貨幣の創造」及「古典的貨幣」の學說は破れてしまつた。ペンディクセンは經濟方面から名目說を樹立しようとする試をする際不知不識の間に數量說に陷り而も此の學說の必要なる前提に付て何等考慮を廻らさなかつた。

吾人は純論理的に貨幣の經濟學說としての名目論が不完全なことを摘發してそれで滿足しようとは思はない。吾人は寧ろ反證を擧げたい。即ち吾人はペンディクセンが名目論の根據だと信じた其の議論が果して支持し得るや否やに就き立入つて調べて見たい。吾人が今迄述べ來つた處が正しいとすれば其の支持し得べからざるは明である。然し一つ一つ論破して行くことが出來たなら我が反對論者は自分が負けた事を自認するに違ひない。此の駁論を試むるに當りてはペンディクセンのカルル・ディールを攻擊した論文が大に役に立つ。

四、

ペンディクセンが貨幣名目論樹立の爲に用ゐた第一の議論は外でもない「金錢債務の名目性」である。彼は論じた。若し金錢債務にして金屬の一定量を目的とするならば硬貨の改鑄があつても債務の眞の內容を少しも變更しない譯である。例へば新貨の含有する本位金屬の分量が舊貨の半分であるならば債務者は債務辨濟の爲に個數に於て二倍の新貨を支拂はねばならなくなる。然るに經驗は全然之と反對を示して居る。金屬內容の減少した新貨幣は舊債務に對する辨濟手段として以前と全く同じ樣に通用する。そこで貴金屬の純分量が貨幣債務の內容の標準となるのではなく國家が宣言した「通用力」が內容を成すと云ふことになる。斯う論じ來つて更に曰く。「由是觀之、單に貨幣國定說に於てのみならず日常生活に於ける普通觀念から言つても金錢債務の對象は現實的のものでなくて唯名目的に定つた或物であると云ふこと、又債務者の義務は貴金屬の給付ではなく支拂手段の給付であつて其の材料や純分は問ふ處でないと云ふ事が解る。換言すれば金錢債務は實在債務でなくて名目債務である。金錢債務は價値の單位で表示されて居る。然し如何なる物が價値の單位の保持者として債務の支拂に

用ゐ得べきかは國家が之を定めるのだ」と。

然らばペンディクセンの說によると金錢債務の內容は何に存するのであらうか。

支拂手段なるものは「名目的のもの」でなく「實在的なもの」であるから支拂手段の一定量でないのは確である。若しさうだとすれば斯かる現實債務も其の債務構成に當つては少くとも暗默に材料や重さに依て自ら定まらねばならぬと云ふことは明である。然し金錢債務の內容は實在的なものではなく寧ろ「名目的價値の單位」であるといふ。是はペンディクセンに依れば「觀念の世界に屬する精神的の或物(ワス)であるが、さりとて其の實在的なることは貴金屬に劣らない」そうである。

吾人は此の定義に依つて少しも啓發されない。故に吾人はペンディクセンが其の著「貨幣の本質」を書く場合の出發點としたクナップの所說に遡らう。クナップの貨幣國定說(第二版七頁)には神祕的な價値の單位を次の樣に定義してゐる。曰く「價値の單位とは人が「支拂の大さ」(die Grösse der Zahlung)を表はすに用ゐる單位である」と。然らば、「支拂の大さ」とは何の事であらう。債務辨濟手段としての現實の貨幣の一定量、換言すれば支拂手段の現實の一定量たることは一目瞭然である。吾人はクナップが「支拂手段」を如何云ふ風に解釋したかを問はねばならない。之に對するクナップの答は支拂手段とは「價値の單位の保持者」(Trägerin von Werteinheiten)だと云ふのである(前揭著書第六頁)。一方に於て價値の單位は支拂の大さを表示し從て支拂手段の單位であり、他方に於て支拂手段はまた價値の單

位の保持者であるといふ。クナップは後の定義を定義として擧げることを憚つたのであるから彼は自分自身で少くとも此の定義が不充分なことを感じたのに違ひない。彼はまた價値の單位は決して「一目瞭然たる觀念」ではないと云ふことを認めてゐる。兎に角今日に至るまでクナップの定義に依つて肝心な點は何物も明瞭にされてゐないのである。

債務の內容は變動すべきものでなくして固定したものでなければならぬのは無論であるからクナップの意見を推しつめると「債務の相對的の大さは不變である」と云ふことになる。金錢債務の內容は一の「關係」であつて從つてクナップ及ペンディクセンが債務の內容を形成するといふ價値の單位は國家に依つて一定の名稱を與へられ右の「關係」を表示するの作用を有する所の抽象的大さに外ならないであらう。此の場合に於ける「關係」とは即ち價値の關係である。然し金錢債務の內容が單に抽象的の價値關係であるといふことは正當だらうか。例之賃貸借契約を締結するに當つて債權者債務者は實際其の債務の他の債務に對する價値關係の外何物も眼中に置かないであらうか。吾人は血の通つてゐる生きてる債權者や債務者が此の問題を果して肯定するものだらうかを疑はざるを得ない。給付と反對給付とが相對する雙務契約に於けると同じく金錢給付を目的とせる債務に於ても亦契約の兩當事者は現實の目的——斯かる目的は唯絕對的の大さであり得るのみである——を眼中に有するのである。然らば此の現實の目的とは何であるか。先づ金錢債務は自ら之を包括する範疇即ち所謂種類債務若くは代

替債務の中に入れらるべきもので法律家も亦何時も此の分類によつて居ると云ふことを知らねばならない。金錢債務の特色は其の內容が個々に一定した特定物ではなくて一定種類の物の一定量(五〇「キログラム」の穀物を引渡す義務と云つた樣なのが其の一例である)である點に存する。特に金錢債務が滿期日に於て如何なる交換價値を代表しようと債務內容上には何等關係なく、債務の目的たる貨幣の一定量が債務契約締結の日に於ける交換價値に比して變動しても少しも構はないと云ふ點に於て他の種類債務と何等の差異がないと云ふことに注目せねばならない。契約兩當事者が債務關係の內部に入つて債務額の價値變動の危險を負擔せねばならないと云ふことは金錢債務が他の種類債務に對して有する特質ではない。だから素人が簡單に考へたがる樣に金錢債務の內容は交換價値の一定量ではない。

然し金錢債務の內容は假令貴金屬本位制の行はれてゐる場合に於ても貴金屬の一定量でもない。何となれば貴金屬で作られて居ない貨幣の債務もあるからである。尙ほ契約兩當事者は債務契約締結當時に於ては鑄造されて居ない一定量の貴金屬を與へて債務から免れたり辨濟を得るなどゝ眞面目に考へやしない。金錢債務の現實の目的は寧ろ本位貨幣の一定量、クナップの所謂有價貨幣(valutarisches Geld)即ち國家が本位貨幣である。眞の意義に於ける貨幣であると宣言したものゝ一定量が貨幣たる職能を果す樣な形を取つたものである。債務者が本位貨幣と云ひ得ざる交易手段(貴金屬本位の場合に於ける銀行劵若くは振替貨幣)を與へて債務を免れ得ると云ふ樣な事實は上述せる所と撞着するものでない。何となれば債權者から云へば債務者が貴金屬貨幣を吳れようが又は鑄造貨幣の一定量に對する債權を讓渡しようが其の債權にして何時でも履行せられ得るものであればどちらでも差支ない。契約當事者は金錢債務契約締結の場合に於ては其の契約當時通用してゐる本位貨幣の一定量の外何も眼中に置いてゐないのである。

處で債務關係の繼續中若し本位貨幣が變つたら如何だらう。さういふ場合には債務者は自己の責にあらずして其の債務を初に協定した目的物を以て辨濟し得ざるに至ることは何等疑ない。然し此の際二つの場合を嚴格に區別せねばならない。第一には本位の種類が變り從來の貨幣材料に代つて他の材料が用ゐられる樣になつた場合例へば銀が金になつた樣な場合である。此の場合には債務者は自己の財產に損害を受くることなくして初に負擔した債務の目的物の代りに、債權者に對し從來の債務の目的物と同一の效用ある他の目的物を引渡すことが出來る。何故ならば債務契約が「貨幣」を目的として締結された動機は此の貨幣の購買力であるからである。購買力の一定の高ではなくて購買力其のものであるからである。債權者は舊貨が債務の滿期日に持つ筈であつた購買力と同一の購買力を新貨で受ければそれで充分滿足される譯である。債務者は今は既に商品となつてしまつた舊本位貨幣の代りに其の價格を新本位貨幣で以て債權者に給付したのである。此の場合本位變動の爲に生じた舊債務目的

物の價値の減少を計算に入れないことは公平の原則に適合する。蓋し或貴金屬を最早貨幣材料に使用することを止めると其の金屬に對する需要は減少し其の價値は非常に低落することになるからである。債權者が被る不當な損害を防ぐには最初の債務の目的の代りとなる新しい本位貨幣の數量を債務の滿期日に於ける前の本位貨幣に對する比價に依つて測定せずに本位變動の日に於ける比價に依て測定するといふ道があるばかりである。此の場合には法律上の一般原則に反する樣なことは何も起らない。又新しい本位貨幣の貨幣單位の名稱であらうと債務の現實の內容には少しも關係がない。

ベンディクセンは例として貨幣單位の名稱は其の儘にして置いて從來此の單位に含有してゐた金屬の分量を國家の命令で變じた場合を擧げて居るが此場合はまるで事情が違ふ。此の場合は材料價値ある貨幣單位の代りに名稱は同一でありながら材料價値なき貨幣單位が行はれ國家が之を從來の貨幣單位と同一額の債務辨濟手段として用ゐることを命じた場合と同視すべきである。此の場合には如何いふことが起るか。吾人は貨幣は必ず有價物でなければならぬといふことを見た其の必然の結果として金錢債務の內容も亦有價物でなければならぬ。最初の債務の目的物たる有價物を國家の命令によつて取り代へられ而かも其の物の價値が初の債務の目的物と違ひ得るとすれば是は一方の當事者には損失で他方の當事者には利益になる樣な債務內容の變動に外ならない。即ち此の變動たる一般法律上の原則に適合せず、否全く之に反するものである。國家が新しい貨幣單位に古い貨幣單位の名を與へたといふ事實は此の見地から見れば何の意義をもなさぬ。何故なれば要は名前にあらずして物自體にあるのであつて貨幣債務の內容は正に變更されてゐるからである。ベンディクセンは「名稱は物を個別的に分類する手段であつて不同の物を區別するの目的を有するものである」と云つた。是れは確に其の通であるが其の爲めに却つて名稱を付けることが實際存する不同を隱蔽し不同に對して平等の外觀を與へるために用ゐられることがある。

斯くの如き國家の行爲は必ず一方の契約當事者を害するのであるから決して害なきを得ぬのは無論である。斯うすることは一般の法律的原則には適合しないが現行法に違反するものではない、其の譯は法律を制定するものは國家であり、法律は國家の命令であり、各國家は何時でも現行法を、假令それが自然的法律觀念によく適合したものであつても之を改廢することが出來るからである。從つて上述の場合には國家の氣儘勝手な行動と云ふ外に何もない。是は恰も國家が「一定量の穀物を目的とせる債務は其の半額又は同量の馬鈴薯を以て之を辨濟すべし」と云ふ樣な命令を下したのと同じである。尙ほ又國家の命令に依り「ターレル」單位の一定額の債務を「麻」單位(「ターレル」の三分の一)の同額で支拂はせることゝした場合及此の反對を定めた場合も實際上之と差異はない。ベンディクセンは本當に「國家が同時に從來の「麻」に「ターレル」と云ふ名を與へ若くは從來の「ターレル」に「麻」と云ふ名を與へた場合を實際に批判する際區別がある」と主張しようとするのであるか。若しもさうだとしたら

其場合には「名稱は物に影響せず」と云ふ命題が適用される。

國家が何時でも自分勝手なことが出來ると云ふことから國定說は貨幣の本質を抽象する積りであるか。國家は何時でも謀殺を無罪と定めることが出來る。然し其の事の爲め謀殺の本質は變ずるであらうか。無罪だらうが有罪だらうが謀殺は依然として熟慮の結果計畫を廻らして人を殺したことである。國家は何時でも從來故殺と稱して居た有罪行爲を謀殺と改稱し謀殺と同樣な罰を科することが出來る。而も是が爲め熟慮及計畫に因る殺人と熟慮なく衝動に因て行つた殺人とは其本質に於て異るといふことに變りはない。

ベンディクセンが貨幣制度と財政との關係に論及し權力關係が貨幣制度に關係のない全く外部の事だと言つて說明してゐるのは注目に値する。貨幣行政に於ける權力關係を濫用し之が存立の目的に反して國庫の利益のみの爲に之を働かせることの間違つてゐる樣に、貨幣債務の內容に對して國家の命令を行ふことも甚だ間違つた事である。殊に斯かる命令が多くの場合に於て國庫の利益の爲に出されるを常とするから尙更である。凡て國家の氣儘勝手な行爲は貨幣の本質には關係のないものである。蓋し貨幣はクナップが主張した樣な「法律の創成物」でなくて「交易取引の創成物」である。國家の意思に因て生じたものではなくて市場取引の必要から生じたものである。從て其の本質は市場經濟の法則に依てのみ理解し得るのである。

是を認識しないと云ふことはクナップ竝其の學派に屬する者殊にベンディクセンの缺點である。然し無論其の結果が大きいだけクナップの方がベンディクセンと違つて偉い。クナップに取つては實際貨幣は純法律的のものであつて少しも經濟的性質を帶びて居なかつた、クナップの名目說を基礎として經濟的貨幣論を樹立しようとした凡ての試みは市場を顧みないのであるから必ず倒れざるを得ない。ベンディクセンが云つた如くクナップが「貨幣の精神を發見した」と云ふことが眞に正しいなら貨幣は經濟的精神を持つて居ないと云ふことになる。

五、

ベンディクセンの第二の議論は紙幣の樣な價値のない材料で出來て居る貨幣や所謂「振替貨幣」の樣な全然材料のない貨幣が存在し長い間流通するのは爭ひ難き事實だと云ふことである。此の點に付てもベンディクセンはクナップに倣うた。吾人は最初に正當な前提から誤つた結論の生ずる好い例があると云つた。此の誤つた結論は變な概念の混亂から來てゐる。クナップ及之に從つたベンディクセンは「材料の價値なき」(ストフフヴエルトロース)若は「材料なき」(ストフフロース)と云ふ概念と「價値なき」(ウエルトロース)と云ふ概念とを混同した。初の二の概念は唯だ技術的のものであり後のは純經濟的の概念である。價値なき材料即ち一般の需要に比して餘り多く存在し過ぎる材料から成つて居る財貨も一定の場所若くは一定の時の制限を受けて存する場合には大きな價値を持つことが出來ると云ふことは誰でも知つて居る。例へば水に乏しい地方の泉の樣な

ものである。又全く材料のない無體物即ち所謂非物質的財貨で而かも大きな價値を持つて居るものゝ在ることも明かである。著作權や特許權の如き是れである。斯かる財貨が價値を有するも矢張り他の財貨と同じく比較的少いからで即ち之に對する需要に比して少ししか存在しない爲である。唯其の少い原因が他の多くの財貨と違ふので即ち他の財貨の樣に同じ物を澤山複製するに要する費用の爲めに少いのではなく、全然複製が出來ないか又は需要に應ずるに足るだけ複製することが出來ない爲に少いのである。即ち此の種の財貨の複製は之に對する需要の强さに無關係に行はれるのである。斯かる財貨を獨占財貨と呼び其の價値を獨占價値と稱し其の價格を獨占價格と云ふ。多くの人には變に聞えるかも知れないが「材料價値なき」及「材料なき」貨幣は獨占財貨特に第二類の獨占財貨の一種である。又價値ある材料で作られた貨幣で其の名目價値が材料價値以上のもの即ち自由鑄造を許さざる貨幣も亦此の種に屬する。斯かる獨占貨幣には二つの條件が必要である。第一にそれが有形のものである場合には之を交易手段たるに適當ならしめ他の用途には全く用ゐられない樣な形式を與へることが必要である。第二に其の分量が制限されねばならない。

自由本位の場合名目論者が貨幣價値を否定して始めて解釋をする樣な凡ての現象例へば墺匈國に金本位が行はれる以前に於ける墺國「グルデン」紙幣の價値の高かつたこと及戰時中瑞典中央銀行が金の受入義務を停止した爲め「冠」が平價以上に昇つたことなどは貨幣の獨占性から自然に說明がつく。

然し材料ある獨占貨幣に付て云つた事はベンディクセンの所謂振替貨幣の樣な材料のない無體無形の貨幣に付ても當て嵌まる。抑も從來不換振替貨幣なるものはなかつたのである。流通することの出來る銀行小切手は從來本當の意味の貨幣ではなかつた。只何時でも取立の出來る貨幣に對する債權で特別の支拂技術上の制度に因て貨幣と同じ樣に流通し得る能力を與へられ從て交易手段たる資格を得たものであつた。交易手段たる作用がいくら貨幣の概念に對して重要であつたにせよ貨幣の唯一の作用ではない。然し今日と雖も既に、振替貨幣が材料なき本位貨幣と竝び行はるゝ場合には後者の價値を非常に低落せしむることが出來る。何故ならば一方に於て振替貨幣に對し少くも幾何の本位貨幣を準備せねばならぬかと云ふ法律の規定はないし、他方に於て本位貨幣の材料の無價値なことゝ外國に對する支拂に用ゐられないことを見て何人も振替貨幣を正貨で兌換しようなどゝ考へないからである。銀行は取付に會ふ心配はない。從てまた銀行に取ては取引界の需要を踰える程多くの振替貨幣を創造した際貴金屬たる本位貨幣で之を調節すると云ふ樣な自然的の「ブレーキ」が缺けて居る。然し理論上から言へば不換振替貨幣も亦本位貨幣として考へられぬことはない。斯かる貨幣には材料的形體がないから材料ある貨幣と同じ樣な交易の對象とは言へないと云ふのは誤謬たるを免れまい。此の際「材料價値なき貨幣が初め材料價値ある貨幣を基礎として發展した樣に此の貨幣も材料ある貨幣の上に成立したのである」などと云

ふ樣に思つてはいけない。何故ならば貨幣の起源的考案と理論的考察とを穿き違へてゐるといふ非難を免れないからである。然し斯かる貨幣の市場に於て一定の割合で商品と交換される、即ち何人も之を無償で得ることは出來ず之を得る爲めに反對給付を必要とすることは確である。然し斯かる振替貨幣本位制は、各銀行が斯かる貨幣を發行する場合の根本原則を協定し謂はゞ貨幣創造「カルテル」でも作ることにするか或は斯かる本位に對し國家が貨幣發行權を留保して之を中央銀行若くは極少數の銀行に委托することにでもするに非ざれば考へ得ない處である。さうでなければ平時に於て本位其ものゝ崩壞は免れ難いことである。

以上述べた所に依つて直にクナップが開卷第一にやつた交易財貨としての貨幣と交易手段としての貨幣の區別は正しくないと云ふことが解る。貨幣は自身が交易の對象であるからこそ交易手段であり、又價値あるものゝみが交易の對象となり得るのであるからクナップのやり方は差異なき處に區別を立てたものである。價値あるが爲めに效用を要し、效用ある物はまた財貨に外ならぬ。從て貨幣は常に交易財貨であり交易財貨としてのみ存存し得られるし、思惟することも出來るのだ。だからクナップが更に、貨幣の財貨である爲には法律規定の範圍以外に於て使用する場合にも有用であること即ち交易の媒介以外に工藝用等技術的意義に於ても效用のあることを要すると論じてゐるのは自然正當の議論とは言へない。是は全く疑ふ餘地がない。貨幣は決して法律の創造物ではない。其の成立は專ら交易取引に基くのである。唯だ何を以て貨幣とするかを定めるのは法律の任務である。更に法律は貨幣たる作用以外何の役にも立たない樣なものでも貨幣と定めることが出來ると云ふことも正しい。然り而して財貨の流通を容易ならしめると云ふ能力の中には非常な效用が含まれて居る譯である。だから法律は貨幣たる役目を果すに技術上特に適當なる物をのみ貨幣だと宣言する。貨幣たる財貨が貨幣以外の目的に組立つことが出來たらそれは慥に利益であらう。然し貨幣たる財貨の資格としては此の必要がない。

之を要するに材料價値のない貨幣や無形の貨幣があると云ふ名目論は詭辯に基いて樹てられた說である。彼等が其の反對論者を「金屬派」と呼ぶことを好むならばそれは此の詭辯の結果である。ペンデイクセンが吾輩の事をも「金屬派」と名付けるか如何が知らないが吾輩は材料價値のない貨幣や無形の貨幣が行はれる本位が理論上はあり得ると云ふことを明に認むるのであるから金屬派と名付くることを得まいと思ふ。紙幣に對しては既に正統學派も同樣な見解を抱いて居たのでアダム・スミスやリカルドーも流通貨幣の數量を市場の必要な額だけに止め之に依て價値の平衡を破ることを防ぐことさへ出來れば、紙幣の方が金屬貨幣の樣に費用が掛らぬから寧ろ優つてゐると論じた。此の二人が金屬派でないことは明であるが彼等はまた名目論者でもなかつた。彼等の見る處では貨幣は交易によつて成立するところの價値を有つて居り貨幣の側から物價に影響を與へることが出來るものである。名目論

者が其の反對論者、即ち貨幣を「名目的價値の單位」又は「表章的支拂手段」としてのみならず交易財貨として觀る總ての論者をば誤解を招く樣な金屬論者などと呼ばないで何か他の名稱を與へて相當の尊敬を拂はれんことは甚だ望ましき次第である。

吾人は此の說明に尙一言を附け加へカルル・ディールのベンディクセンに對する論文「戰中戰後の爲替相場問題に付て」の中に書いた議論を見ようと思ふ。同論の中に曰く「貨幣は一定の經濟組織內に在ては唯支拂手段若くは計算の單位である、唯財貨に對する支拂命令であり「シンボル」であるに過ぎないといふことに直に認めねばならぬ處である。共產主義の經濟組織に在つては正に其の通りであらう」云々。吾人にはディールが必要もないのにベンディクセンの肩を持つた樣に思はれる。今日吾人が貨幣として考へる物は交易取引の中から生れ之と共に消滅するものであつて其の存在には交易取引と市場經濟とを必要とする。共產經濟に在つては市場がなく從て貨幣もなく、行つた勞働に對する證憑があつて「共產國家の一員」は之に依て一定量の財貨を獲得する權利を得るのである。勿論何人も斯かる證憑を貨幣と名付くるのは差閊はない。然しながら此の兩者とも之によつて自然財貨を獲得することが出來る點に於て同一であると見るが如き漠然にして皮相なる見解の爲めに本質に於て全く異つたる二つのものに同一の名稱を與へてゐるのだといふ事實を見逃してはならない。

上述する處に依て名目論の重大なる二個の論點を論破し同時に反對論を建てることが出來た。然し吾人は是で滿足して仕舞はうとは思はない。ベンディクセンも亦彼の反對者特に玆に引用した論文に於て攻擊した反對論者に對し積極的の事實を示すだけでは滿足せず進んで反對論者の說を論破しようと試みた。吾人も亦此の方法に倣はうと思ふ。

ディールはベンディクセンに對して物價は人が賣買の際商品を貨幣と比較することに依て成立するのだと云つた。特に金本位の場合には賣手は買手に「貴方は我々の商品に對して何れ丈け支拂つてくれるかを誰でも欲しがる物即ち金で計算して下さい」と聞くのだと云つた。ベンディクセンは之に對しては從來から「物を買つたり値踏みしたりする場合に誰も金の事なんか考へやしない」と云つてゐる。處がディールは之を駁して「國民經濟的現象の關係にまで考量を加へることは普通人の爲ないところだ」と云つた。

ベンディクセンは之に對し稍や激越の文句を以つて「之は議論ぢやなくて逃口上だ。比較といふことをして而かも其の比較を知らないでゐるといふことはあり得べからざることだ。ディールは說明に困つたので擬制(フィクション)を持つて來たのだ。然し事實賣買契約の締結に當つて買手は必ず比較をするではないか。即ち彼は目前に提供された商品に對して支拂ふべき金で他の物が何の位買へるかといふ事を考へる。彼は各種の賣買行爲に依て得られる各種の利益を互に比較して見る。然し何人も金を所有することに

因て得られる滿足を考へて幾何の貨幣を商品に對して支拂はねばならぬかと云ふ樣なことを計算しやしない。ディールの說明は誤であり實際生活に反して居る。」と斯う述べてゐる。吾人はディールの說明はそんなに誤でもなく實際生活にも反して居らず何の點から見てもペンディクセンよりも多く吾人に眞理を語るものだと信ずる。慥に買手は買ふと云ふことを決する前に彼が今支拂ふべき貨幣を他に使用した場合を比較考究するに違ない。然し少くとも彼が經濟的に物を考へ輕々しく事をすまいと思へば此の比較をする前に先決問題を考へるに違ない。此の先決問題といふのは其の支拂ふべき價格が適當であるか如何かといふことである。此の價格が適當であるか如何かといふ問題は要するに商品と貨幣との比較——精密に言へば商品の價値と貨幣の價値(金本位の場合には金の價値)との比較に外ならない。勿論此の場合金に對する彼の個性的評價は少しも作用を現はさぬ。夫は大海の一滴である。何故ならば金の客觀的價値は金に着目する凡ての人の評價の結果として生ずるので需要された金の一定量の採掘に要する生產費に表はれてゐるからである。然し買手は此の生產費をも考慮するの要はない。彼は同一の商品を得んと欲して居る凡ての者が玆に要求されてゐる價格を支拂ふことを常とするや否やといふ問題を考へればよい。彼が通觀の出來る範圍で右の價格の支拂が普通だと分ればもうそれから先考へる必要がなく此の價格が自分が得んと欲して居る商品と同價値のものであるといふ確信が得られる譯である。買手が斯うして其の支拂はなければならない金高を知ると此の額を他の用途に使つたらどんなだらうかといふ比較が出來る樣になる。此の場合常に價格が適當だか如何かといふ問題を眼中に置くのは勿論である。

斯くて吾人は買手は充分意識して必要な比較を行ふものだといふことを見た。彼が判然自覺しないのは單に金本位に於ける貨幣の價格と金の價値とを結び付ける關係に過ぎない。彼は他の人が同一商品に對して支拂ふ價格と彼が今支拂はねばならぬ金高とを比較する。然し彼は斯くして商品の價値と金の價値とを比較してゐるのだといふことに氣が付いてゐないのである。然し之は決して「生活の論理」に反するものでない。何となれば何人も行爲の眞の本質や其の奥に横はつて居る原因を究めずして毎日毎時行爲をしてゐるのが常だからである。

金本位に付て云つた處は自然他の凡ての本位特に紙幣本位に對しても亦當て嵌まる。唯紙幣の價値は貴金屬と違つて常に且專ら市場に流通する紙幣の分量に依て定まる。然るにディールは人々の紙幣に對する信任の其の價格に及ぼす影響を非常に過重視して居る樣に思はれる。信任は經濟の範疇以外に屬するもので交換價値の成立に直接の影響を與へることが出來ない。將來貨幣價値が下落するだらうといふ心配から多量の紙幣が市場に投げ出され又「現在商品の方が貨幣より良い」といふ理由で商品の供給を手控へるといふことがあり得るところから右の信任は市場の狀況を作るの動機として働き得るといふことが言へる。然し此の信任の貨幣價値に及ぼす間接の影響は自ら唯一時的たるに止まる。

蓋し各經濟主體の行動によつて心配してゐた貨幣價値の下落の生ずることが明になれば多くの場合に於て財貨が永く市場外に置かれる樣なことはない。而して終には現存紙幣の總量が財貨と平衡を保つ樣になる。

尙ほ其の他の點で吾人はペンディクセンよりもディールに與する。ディールは「金の價格」に付て論じ之を其の內面的價値と區別しなければならぬと言つてゐる。ペンディクセンは之に對してディールの議論を進めて行くと金本位成立の場合に於ける金の價格の存在を否定せねばなるまいと言つて反對して居る。ディールの見地に立て見るとペンディクセンは價値と價格とを取り違へてゐないが「等し」いといふことゝ「同一」といふことを取り違へて居るのである。此の說は全く正當であつて或財貨が貨幣たる作用を盡しさへすれば此の財貨の貨幣價格は最早問題でない。封度の金は一三九五麻に等しいといふことは實際「等しい」のでなくて「同一」なのである。是はディールが確に根底に於て考へてゐたところであつて唯彼は之に適當な說明を與ふることを怠つたに過ぎない。之に反してペンディクセンは金本位の場合貨幣の價値は金から生ずるのでなくて反對に金の價値は貨幣に依て定まるのだ即ち國家が定めた鑄貨單位に依て定まるのだと主張するのであるが之は明に誤である。何となれば一の物の價値が其物自體何等の價値なき他の物から生ずるといふ事は考へ難い所であるからである。

斯くてペンディクセンにとつては價値は單に主觀的價値として存在するに過きず從つて貨幣に固有價値ありとする論者に對し無雜作に攻擊をしたのである。蓋し主觀的價値論に依て貨幣價値の問題從て貨幣價格成立の問題を解決することは出來ない。客觀的價値、交換價値及一般價値に對してペンディクセンは何等價値關係を認めない樣である。以下論ずる處に依て明なるが如く之は確に間違つてゐる。

七、

ペンディクセンは日常生活の經驗に依てディールを論駁しようと試みた後更に彼を純理論的に說破しようと努めた。吾人は貨幣は固有價値を持つて居らず貨幣の代償として買はれる商品の價値を持つて居るばかりで謂はゞ之を反映してゐる樣なものであるといふ名目論の根本原則を知つて居る。貨幣其の者は唯「商品價値の一般的指示者、一般的計算單位」であり若くはペンディクセンがクナップの忠實な承繼者として言つた樣に「名目的價値の單位」であり唯だ商品價値を比較するの手段であらねばならないと彼等は主張するのである。ディールは之に對して價値を相互に比較し得る爲には自分自身に價値を持つて居る比較手段がなければならぬと言つて攻擊した。ペンディクセンは之に對して斯かる「原始的比較方法」はあり得ることはあり得るだらうが決して必要なものではないと言つた。而して更に「經濟生活上習慣的に比較さるゝ」場合には人は抽象的性質の或比較方法を用ひ結果を比例數で表示する。此の方法は「個々の目的物と標準として撰ばれたものとの關係を明にするのみならず目的物相

互の間の關係をも直に明にする」といふ利益があると述べてゐる。ペンディクセンの此の議論は非常な誤解に基き、又截然區別すべき二個の事物を混同したことに基因する。固よりディール自身も亦此の誤解に對しては全く責を免れ得ない。彼は貨幣を常に「價値比較手段若くは價格確定手段」(Wertvergleichungs-bzw. Preisfestsetzungsmittel) と名付け人が價値の一定した尺度を想像するといけないといふので價値の尺度(Wertmass)といふ名稱を努めて避けて居る。之に依て彼はペンディクセンに對する攻擊を餘程弱めた。蓋し貨幣にして若し各財貨間に於て既に定つて居る價値關係を表示し之を通觀するに便ならしめるといふこと以外の作用を營む要がないならば單に抽象的の大さ「價値の單位」で充分であり、支拂手段は外部に對して此の價値の單位を代表するものであればよいといふことは確に正當である。然し是は決してディールが言はんと欲した處ではない。彼の說を能く玩味して見ると彼は既に定つた商品の價値關係を表示することに就て論じて居るのでなくて先づ第一に此の關係其者を見出すことに就て論じて居るのである。それで此の目的を達する爲めには如何しても先づ個々の商品の價値と他の一定の商品即ち尺度たるの仕事をする商品の價値との關係を定めなければならない。此の特別の商品、他の財貨の價値を定める爲めに比較の具に供さるゝ一定の商品、換言すれば他の財貨の價値を測定する商品即ち貨幣である。さうだとすれば當然貨幣が眞に價値の尺度たる作用をすることが出來る爲には其物自體有價物でなければならぬといふことになる。人或はさういふ價値の尺度の必要があるかどうかを問ふかも知れないが吾人はペンディクセンでも此の問ひを否定しやすまいと信ずる。彼の說に依れば價値の單位は當該商品の價値關係を表示する形式であるから若しも右の問ひを否定するならば彼は自分自身の演繹の基礎を足下に蹂躙することになるのである。若しも價値關係の基礎として必然存在する價値の絕對的の大さを單一の有價物で測定することが不可能であるならば右の如き價値關係を明瞭に定めることは出來ないであらう。二個の物體の長さの關係を定めるには各個の長さを一の尺度で測定しなければならないのと同じである。だから價値の尺度として或る價値ある物を必要とすることは交換經濟に於ては當然である。

ペンディクセンの謬見を經濟學說上行はれて居る短い形式で現はさうとすればかういふことになる。即ちペンディクセンは「價値の尺度」(Masz der Werte) と「價格の標準」(Maszstab der Preise) とを取り違へ價値關係を見出す手段と既に發見された關係の表示手段とを混同した。貨幣は此の二つの作用を行ふことは行ふが價値の尺度であるから價格の標準となり又價値の尺度たる場合にのみ價格の標準となるのである。

然るにペンディクセンは此の說に反對した。「物の價値と價格は長さや重さの樣に「物の性質」ではない。價値も價格も物に存するのでなくて人に存するのである。故に或物體の長さの計算は「價格の計算や價値の量定とは全く異つた思考作用に屬する」ものである。唯同じなのは長さ(其の他凡て物の

性質)と同じく價格も單位で現はされるといふことだけである。」斯う彼は信じてゐる。成る程物の價格は市場に於て或財貨と引換に獲得される貨幣の量に外ならないのだから財貨の價格は其の物の性質であり得ないといふのは全く其の通りである。處で然らば一定の財貨若くは財貨の一定量に對して常に或一定金高の貨幣を支拂はねばならないのは一體何故だらうといふ難問が次に起つて來る。之に對してペンディクセン其の他凡ての名目論者は何等の解答をも與へて居ない。或は「主觀的の價値見積」の語を以て逃げて居る。然し之れでは丸で説明にならぬ。蓋し一定額の貨幣の主觀的價値見積は貨幣が購買手段として色々に用ゐられ得ることによつて定まる。即ち既に定まつて居るところの價格に依らざるを得ないのである。之れではこれから説明せねばならない事を先づ前提にして居ることになる。斯く煎じ詰めると結局商品にも貨幣にも客觀的價値が存在してゐることを認めざるを得なくなり之に基いて貨幣の一定額と商品の一定量との間に其の交易に必要なる比價が成立するのである。

此の客觀的價値は決して單なる相互關係とは言へない。蓋し此更に絶對的の大さが存在しなければ二つの大さが相互に相對的關係に立つて居るといふことは全く考へ得られないからである。然し此の客觀的價値が何によつて成立し何に基いて存在するかといふ事は此處に穿鑿する必要がない。兎に角それが存在してゐるといふ丈けで澤山だ。そして貨幣の客觀的價値に對しては統一的名稱が全くないのであるが客觀的財貨の價値に對しては貨幣價格だけが統一的名稱であるといふ點に於てのみペンディクセンの説に贊成することが出來る。

財貨の客觀的價値が存在するものとすればそれが假令財貨の本來の性質でないとしても價値其のものが數量的大さを表すといふ一事からでも此の價値は計算せられることが出來るから此の點に於て數量的に測定し得る所の財貨の性質に似て居る。而して此の財貨の價値の測定即ち此の目的の爲めに撰ばれたる有價物と比較することに依て財貨の價値を決定するといふことは思考作用から見て其の物の他の性質を測定することに多くの點で似通つて居る。根本に於て常に異つた處があるに過ぎない。財貨の價値の基礎を成す事情は常に變化するものであるから、財貨の價値は決して一定したものでない。從て貨幣價値も一定でなくて變化するものであり、一定不變の價値の尺度といふことは考へ得られないのである。

ペンディクセンは價値の尺度と價格の標準とを取り違へたのみならず更に非常な撞着に陷つてゐる。彼は先づ價値と價格を物の性質と同視してはいけないと説明した。かくて彼は物の「性質」は之と同樣の性質を有する特定の物を以て測定することが出來る、けれども價値及價格の場合には之が出來ない。價値及價格は單位を以て表示することが出來るが、之を測定することは出來ないと云ふことを明にせんとした。さうだとすると價値を表示する單位と「性質」を表示するのみならず之を測定する單位とは全く異るものであつて從て相互に比較し得ざるものといふ結果になる。一方には一定の價値關

係を表示する抽象的の大さであり他方には物の長さや重さを比較するの標準になる――即ち之に依つて長さや重さが始めて分る所の一定の長さや重さを有する特定の物が有るといふことになる。然しペンディクセンは價値と物自體の有する數量的に測定し得る性質との間には彼が認めんとするよりもつと深い類似の點があるといふことを暗々裡に感じてゐたに違ない。而も之が何の役に立つか。彼は價値測定の單位が何か固定したものでなければならないといふことを認めることが出來ず又認めようとも思はない。そんな事をすると名目的貨幣論の全部を抛棄せねばならなくなるだらう。だから彼は「價値及價格」とハッキリ區別した「性質」の測定單位も矢張り具體的のものではなくて彼の「價値の單位」と同じく抽象的のものであるといふことを主張せざるを得なくなるのである。彼は叫んだ。「我々の長さの單位たる米突を見よ。それは具體的の長さであるか又具體的でなければならぬだらうか。三歳の童子も米突の何たるかを知つて居るがそれが地球の周圍の四千萬分の一に當るといふことを知つて居るのは極少數の教養ある者に過ぎない。――布片や腸詰や部屋の長さは赤道によつて測定してゐるのだと主張すれば誰も冗談としか思ふまい」と。最後にペンディクセンは米突と米突尺との混同を警めた「米突尺は長さを持つて居る。米突尺が示して居る長さがそれだ。然し米突といふのは長さ即ち「長さの名」で米突の米突尺に於けるのは價値の單位の支佛手段に對する樣なものである。米突尺や支拂手段は其の示す大さを保持して居るものである」と。此のペンディクセンの議論は明に誤である。

米突は假令米突尺といふ具體的の形態を有せず唯だ長さの名稱として用ゐられにしても、精確に定つた具體的の(尤も觀念上のものではあるが)長さの一定量である。此の量が如何なる具體的の物體に基いて出て來たものであるかといふことを知つて居る者は教養ある極少數の者に過ぎないのは勿論であらうが米突といふのは長さの如何なる具體的の量を意味するのかといふことを知らない者はない。米突の語を口にする場合之を以て專ら一定の長さの關係を表示する抽象的名稱だと考へる者は恐らくあるまい。ペンディクセンの價値の單位は之と全く違ふ。其れは絶對的の價値の大さといふのではなく關係的名稱即ち比例に外ならぬ。ペンディクセンの比較はまるで兩足とも不具の形だ。彼の類推の缺陷は「具體的と抽象的」の對照と「有形的と觀念的」の對照とを混同したことに存する。現象界に屬する物――米突も長さの一定量として之に屬する――は假令吾人の眼前に觸覺し得ず觀念的に思考するだけであるけれども矢張り具體的である。抽象的といふのは之に反して現象界に屬せず概念界にのみ存する物である。例へば數を數として見た場合、其の他一定の分量に無關係に唯だ長さ、重さ、價値などといふ樣な場合の概念が是である。

ペンディクセンは彼の誤つた類推に依つて表示手段若くは比較手段としては具體的の大さのみならず抽象的の大さでも差支がないといふこと、各種の長さを表示し且相互に之を比較する爲めには論理上ディールの所謂比較仲介物(tertium comparationis)を要さないといふ樣なことが言へると思つて居る。

實際に於て彼は既に定つて居る關係を表示する爲めには具體的の大さを要せず抽象的の大さが此の作用を行ひ得るといふことを證明し得たのである。然し是は自明の程で證明を要さない明白な事實である。彼は新に測定をするのにも亦具體的の大さを要さないといふことを證明せんと欲して之を證明しなかつた。而も斯かる證明は不能のことであるから彼に出來よう筈はない。

然しベンディクセンは自分のした證明を全く立派なものと思ひ込み、到達し得たる誤つた目的地點から更に一歩を踏み出した。彼は長さの尺度から更に貨幣價格に移つて行き、價値の測定に對しては比較仲介物の如きは全く餘計なものであるのみならず論理にも反して居ると主張した。此の驚くべき斷定を爲すの理由として「總ての價格は相互に密接の關係がある」といふことを唱へた。其の意味は價格の絶對的の高さなどいふものは問題とするに足らないといふのである。「價格が二倍になつても半分になつても各個人の財産及所得が同時に二倍になり半分になる場合には各個人に取つては少しの影響もない。貨幣の表示に於て最も肝心な點は物價の相互關係である。そこでベンディクセンは語を續けて物價は關係數たるの性質を有し凡ての價値關係の一般命名者即ち價値の單位としての計算者たる地位に在るのであると唱へてゐる。

價値の尺度の價値に變動があつても狹義に於ける財貨の關係的價値を變せしめないといふことに付ては何人も異論がないのであるから價値の尺度は自然無價値のものでなければならないといふ。其の

謬論たるや自ら明である。各財貨間の不變不動の價値關係は各個の財貨の價値を尺度たる財貨即ち貨幣の價値と比較して初めて見出し得るのである。而して此の比較は各個の商品と貨幣との交換比例を決定することによつてのみ實現されるのであつて而かも此の決定は專ら市場に於ける商品と貨幣たる財貨との交換に依つてのみ實行され得るのである。此の點に於てベンディクセンの思索に非常な缺陷があることが認められる。彼は貨幣價格は市場に於ける商品と貨幣との交換に依てのみ出來るのだといふことを認めない。貨幣が交易の對象であつて、從つて其者自體有價物であるからこそ價値の尺度となることが出來るのである。又價値の尺度であり且つ細かく分けられゝばこそ價格の標準即ち他の財貨の既定價値關係の表示手段達觀手段たるに適するのである。然しベンディクセンは尙ほこんな事を曰つてゐる。貨幣は單に「凡ての價値の一般的命名者であるから個々の財貨に各單位を與へることは論理に反して居る。」何となれば「一般的命名者は其の意義から言つても計算者ではあり得ない筈である。そして比例の場合には單位は何等絶對的價値を表示してはゐない」と。此の最後の議論でベンディクセンは價値の單位と長さの單位の類推を全く抛棄してゐる。即ち彼は米突といふ單位は假令觀念上のものとするも絶對的の長さを表示するものだといふことを決して否定しようとしてゐないのである。然し彼が命名者と計算者といふ比喩を用ゐて證明せんとした處は吾輩には全く不可能である。貨幣が凡ての價値の一般的命名者であるといふ比喩に對しては何人も決して非難をしないだらう。然しなが

ら此の事は決して貨幣の固有價値を認めることゝ相容れぬものではない。計算者は貨幣財貨(Geldgut)其者ではない。計算者は一定金額としての貨幣價格即ち貨幣財貨の約數である。計算者の命名者に於けるは部分の全部に對する樣なものである。

さて之からがディールに對する最後の駁論である。金は「價格の表示及比較」に對して全く用をなさぬものである、「金はディールが云つた樣な役をしない」。何故か。理由は簡單である。貨幣は價値を持つて居ないで唯流通性を有するに止まり又日常人は金で支拂をするのみならず紙を以ても亦支拂をするからといふのである。即ちベンディクセンに依れば貨幣たる役目を果す爲めには材料價値ある貨幣を要さぬのであるから價値ある財貨は貨幣の職能上役に立たないのだそうである。頗る奇妙な論理ではあるまいか。

然しベンディクセンは金が貨幣たる用をなさぬといふことに對しもつと廣い根據を持つて居る。曰く「商品を金で評價するには價値の比較といふ前提が必要である。……　比較し得る物だけが比較することが出來る。……だから物の客觀的價値を貴金屬と比較することは出來ない。何となれば物の客觀的價値は物が或價格で賣買される場合に於ける其の賣買者の判斷であり判斷を一の具體的物件と比較することは出來ないからである。それからまた客觀的價値を主觀的價値と比較することも出來ない。何となれば價格に對する判斷は個人的の快樂感と同じでないからである」と。吾人は茲に客觀的價値が決して價格の判斷ではないといふことを說明すまい。之をするには價値問題を全部詳說しなければなるまいから。然し「商品を金で評價する」といふのは一體如何いふ意味なのであるか。要するに、商品の客觀的價値を金の客觀的價値で測定することに過ぎないではないか。然らば之はベンディクセンのいふ二つの判斷即ち等しきものと等しきものとの比較である、然しベンディクセンの所謂「金の客觀的價値」とは法定硬貨價格なるや明かである。然らばディールがベンディクセンのことを「價値と價格とを全く混同して居る」と非難したのは正當ではあるまいか。然し此の場合金本位側に在つては金は全く價格なくして價値だけ持つて居るいふ事を認めねばならぬ。ベンディクセンは之に對し何時でも「金の主觀的評價」の語を以て答へて居るが商品と金を比較する者は誰も商品の客觀的價値と金の所有に依つて生ずる快樂感とを比較しようなどとは考へやしない。それにはかうした比較が起ると主張する「金屬派」を連れて來ねばならぬだらう。

然しベンディクセン自身も此點に付て一種の不安を感じたらしい。若しも金が財貨として唯だ主觀的評價の目的物たり得るのみとすれば文化の低かつた前時代に在つて如何して交易財貨として價格計算に役立つことが出來たらうか。彼は斯う疑問を提出し之に對して頗る簡單なる答辯を與へてゐるが其れは何人も一寸反對し得ない樣な長所を持つて居る。即ち價格と客觀的貨幣が成立する瞬間から前の交易財貨の主觀的評價が消滅するといふのである。成程至極尤な議論である。然し吾人は茲に「價格

及客觀的價値」が主觀的評價に代る其の徑路を調べて見たい。すると吾人は自ら此處に非常な缺陷のあることを知る。「一般的交易財貨の價値は……客觀的の大さ即ち價格の相互關係である」と。吾人は一足跳びに深い淵を飛び越えたのだ。交易財貨は唯だ主觀的にのみ評價されてゐたのに國民經濟が始まると共に「市場は其の價格で評價する心に打勝つた」。而して最早交易財貨でなくなつた貨幣の客觀的價値は價格で以て定められるのだ。貨幣價格が市場に於て如何いふ具合に成立するかに付てはペンディクセンは一言をも費すことが出來なかつた。それをするには彼は貨幣價格が商品と貨幣財貨との交換の結果としてのみ生ずるものだといふことを認めざるを得なかつたのである、更に吾人は各個人は交易財貨(ペンディクセンは貨幣に對して交易財貨たる性質を認めようとしなかつた)を其の市場價値に依つて、即ち此の場合「其の支拂手段としての價値」に依つて得たるといふことを知る。斯うなると吾人は聊か駭かざるを得ない。ペンディクセンは縷々演繹論によつて貨幣が國有價値を持つて居ないことを吾人に解らせ樣と努めたかといふと吾人は忽ち貨幣は假令唯支拂手段としてであつても兎も角市場價値を持つて居るといふことを知つたのである。

然しペンディクセンは此の點に於ては唯名稱の撰び方が惡かつたのみの樣である。彼の所謂市場價値とは人が「名目價値」といふ間違つた呼び方をするを常とする物のみを指してゐたことは明である。即ち彼が吾人に言はんとする處は「交易財貨から價値の單位が發生する」といふことに過ぎない。誰も此の發生の徑路に付て明瞭な說明を與ふることが出來ると主張することは出來まい。然し彼は茲に於てまたディールに對する駁論の出發點に達したと信じて居る。彼は今や最後の結論を爲すべき時だとして「價値決定手段又は價格比較手段たる貨幣の職能を遂行するものは金ではなく抽象的の價値の單位である。之に依て貨幣價値の問題は決せられる。米突が長さであつて、長さを持つて居ないと同じく價値の單位は價値である。抽象的價値の單位として の貨幣は觀念上に於て存在する大さであるから決して價値を持ち得ない。是は論理上不能である。然し支拂手段としての貨幣は價値を持つてゐる。即ち其の貨幣の表示する所の客觀的價値を持つて居る。それは恰も米突尺が其の表示する長さを持つて居ると同じことである」と述べてゐる。ペンディクセンの此の議論を批評するには吾人が前に既に言つた所を再び繰り返せばよい。米突といふものを心に描く人は何か現象界に於ける物から取つて來た樣な一定量の長さを眼中に置くのだ。また心の中で考へてゐる米突は長さであるのみならず、假令唯だ觀念の上のみにせよ長さを持つて居る。然し此の事はペンディクセンやクナップの貨幣の單位には通用しない。彼等は貨幣の單位は價値の或量をも含有せず、また思考されただけのものをも含有せず唯價値關係に對する表示手段だといふのである。そして價値の單位所持者としての支拂手段は斯かる關係の代表者でなければならぬと言ふ。然し價値の單位は價値であるが價値を持つて居ないといふ命題は一體如何いふ意味なのであらうか。マルクスの言つた「勞働は價値であつて價値を持つて居るので

はない」といふ言と同じ意味でないのは勿論だ。マルクスは勞働と價値とが全く同一なること即ち彼に取つては價値とは勞働の異名であるといふことを言はんとしたに過ぎない。是れは單位否部分が全體と等しといふことなのだからペンディクセンは斯うしたことを言ふ積ではあるまい。然し幾ら善意に解してもペンディクセンの語には是より外の意味を考へ得ない。一體物が(同一の場合は別として)自體の中に其の最小量さへも含んで居ない樣な或物と同じだといふことがあるだらうか。價値の單位が價値であるなら、假令觀念上のものたるにせよ或量の價値を其中に含有せねばならぬし、何等の價値を含有しないとすればまたそれは價値でないことになる。ペンディクセンの語は全く意味をなさない。

最後にペンディクセンは「抽象的價値の單位としての貨幣は觀念上に於て存在する大さであるから決して價値を持ち得ない。是は論理上不能である。然し支拂手段としての貨幣は價値を持つて居る。即ち其の貨幣の表示する所の客觀的價値を持つて居る。(恰も米突尺が其の表示する長さを持つて居る樣に)」と言つてゐるが然らば支拂手段は如何なる客觀的價値を表示してゐるのであるか。言ふまでもなくそれが「價値の單位」を表示してゐることは何人も異論のない所で而かもペンディクセンに依れば之れ等は何等の價値をも持つて居ないといふのである。全く解すべからざる自家撞着に陷つてゐる。

吾人はペンディクセンの言はんとしてゐる眞意をよく知つて居る。即ち抽象的價値の單位は價値ではなく商品價値の關係を表示し達觀せしめる純粹の算術的大さであつてマルクスやクニースが價格の標準(Preismasstab)と名付けた處のものである。貨幣が其の他の作用を行はないでもいゝなら無價値でもよからうとは前に云つた所である。然しながら價格の標準たる貨幣は既定の貨幣價格を前提とし貨幣價格は他の財貨の價値と貨幣の價値とを比較して生ずるのであるから價格標準たる貨幣の作用は原始的のものではなく右の樣に無價値たるを得ない。貨幣は價値の尺度である。然し貨幣の價値は市場に於て商品と貨幣財貨とを交換して初めて生ずるのである。貨幣は交易財貨であり交易財貨たることが特に適當であるから交易手段になつたのである。貨幣が交易財貨及價値の尺度であればこそ價格の標準「價値の單位」になり得るのである。茲に於てか名目論の正體が露はれた。貨幣債務の名目性及材料價値なき貨幣の存在なる二個の正しい前提から貨幣は何等固有價値を要さないといふ誤つた結論に達したのである。さうすれば必然の結論として純抽象的の大さたる貨幣の觀念が生ぜねばならなかつたのである。斯かる抽象的大さは唯だ關係の表示に用ゐられ得るのみである所から價格の標準といふ貨幣の第二義的の作用を貨幣の本質的特徴とするに至つたのである。「價値の單位」並「價値の單位の保持者」たる支拂手段成立徑路の眞相依つて件の如し。

終に臨み一言する。本論の目的は名目論眞の經濟的貨幣問題即ち商品と貨幣との交易問題を解決し得ないから貨幣の經濟的學說としては存在の價値なきことゝを叙述せんとするに在つた。吾人は直

接間接に此の證明を爲したと信ずる。此處に引用したるペンディクセンの論文中に於ける其の他の議論を更に廣く詳論するの必要はない。其は唯だ吾人の既に反駁した彼の主張を繰返すか又は名目論的貨貨學說とは關係のない純粹の數量說を述べてゐるに過ぎない。此の學說が維持し得るや又如何なる程度迄維持し得るやの如き問題は本篇の目的とする所では無い。（完）

落